

## 安国寺由来記

浦田町

義 沖 光

はじめに

もう一三年も前だったが、NHK日曜大河ドラマ「太平記」で室町幕府創建時代の武士や公方くぼうたちの生活様式からあでやかな東山文化などが放映され、おおいに興味をそそられた。また昨年の大河ドラマでは「執権・北条時宗」の一代記が採り上げられ、政権内での権力争い、元寇での戦闘場面のすさまじさ、反戦を説く日蓮和尚おしょうへの迫害、逃げまどう庶民の姿などを見て、私の中世史への学び心が呼び醒まされた。

折りも折り、別府史談会では仏の里国東の秋を探訪して「安国寺」を訪ね、この寺院が足利尊氏を祀っていることを知った。足利尊氏といえば、戦前の国史教育（皇国史観）では南北朝時代の「逆賊」として、楠正成や新

田義貞らの「忠臣」に比べて白眼視されていた。

ここで、素人ながら、安国寺の由来を調べてみることにした。そして足利尊氏という英雄の側面にも触れることができればと思い、筆を執ることにした。

### 安国寺建立の社会的背景

今からざっと八百五十年前の十二世紀半ば、世はまさに混沌の極きよくにあった。鎌倉幕府にとって十三世紀後半の蒙古（大元国）襲来（文永の役一二七四年、弘安の役一二八一年）という対外的危機と同時に、朝廷では皇統の対立（大覚寺統と持明院統）が深刻になっていた。こんな中に即位したのが後醍醐天皇であつた。後醍醐天皇は、天皇親政をうたい鎌倉幕府と対峙たいじしたため、幕府（北条高時）は後醍醐天皇の討幕軍を平定せんとして高氏に命じ西上せしめた。だが高氏は、命に逆らつて六波羅探題を攻め滅ぼし、鎌倉幕府をも滅ぼした。

この戦功により、建武中興に際して最高の恩賞を受けたのは足利高氏である。名も「尊氏」を戴いて武蔵・常陸・下総しもふさの守護職しゅごしきを得た。

しかし、中興政治の失敗を見てとった尊氏は、鎌倉に



▲仁王像のある山門前から

下って後醍醐天皇と対立し、東奔西走して朝廷側の楠木・新田・北畠等の諸勢力を破る。その上で北朝を奉じて暦宝元年（一三三八年）、京都に幕府を開き武家政治を復活した。こうして、やっと太平を得

たが、元弘二年の乱（鎌倉幕府倒壊）以降、六年間の戦乱で残ったのは荒廃と社会不安のみであった。

この社会状況を救い、天下に太平をもたらすための戦後処理が「一国一寺一塔」の建立という宗教的文治政策であった。

この政策は、貞和元年（一三四五）光厳上皇の勅許を仰ぎ、足利幕府が夢窓国師の力を借りて全国六十余州の

国ごとに建立し、国家安穩・衆生利益の祈願および元寇以来の戦死者追善供養の場としようとするものであった。この寺名が「安国寺」であり、この時の塔が「利生塔」（りしょうとう）と呼ばれる供養塔である。

これら寺塔の建立は、建武年間（一三三四～一三三五）から計画されていたらしい。この一国一寺一塔という配置は、律令国家の奈良朝にその先例が見られる。聖武天皇（七〇一～七五六）による国分寺、国分尼寺がそれである。ちなみに、豊後国分寺跡は九大線豊後国分寺駅南側一帯の地にあったとされ、その一角には現在、大分市歴史資料館が建てられている。一方、国分尼寺の位置については今日なお判明していない、という（大分放送『大分歴史事典』）。

### 豊後の国 太陽山・安国寺の由来

国東町西部郊外に、戦後いち早く発掘された安国寺遺跡で有名な安国寺集落が存在する。この集落の一番奥の小高い丘に太陽山・安国寺の堂宇がひっそりとたたずんで見える。旧参道は狭く自動車もやっと通れるほどであつ

たが、圍場整備とかで道路が掘られ、山門まで車で行くようになった。寺の前には、いつ頃造成されたのか用水溜池があり、夏には村の子供たちが泳いでいた。旧参道は、この溜池の土手を通って詣るしかなかった。

鎌倉時代末期には豪族の田原氏、富来氏などが支配しており、延元元年（一二三三）に敗走しこの地まで逃れて来た足利高氏は、両豪族の助けで勢力を盛り返すことが出来た。その功績により、「豊後安国寺」は国東に建立されるようになったのである。

太陽山・安国寺（臨濟宗 妙心寺派）は応永元年（一三九四）、足利尊氏を開基とし、絶海国師（後記）を開山に勧請して創建された。当山は六十八番目に創建されており、全国の安国寺建立史上に最終的意義を持つ寺として重要視されている（『安国寺風土記』）。

さて、寺を前にして古めかしい石段をあがると、ずんぐりとして厳めしい石造りの仁王様が参詣者を迎えてくれる。境内への入口には、いかにも禅宗の古刹らしく茅葺きの山門がある。この山門は天正年間に大友氏の焼き討ちに遭ったが、天明四年（一七八四）に再建された。約二百五十年を経て老朽化が進んだことと、「仏の里」

が観光化して全国各地から参詣する人々が増えたため、十年ほど前に新築したと和尚が語ってくれた。

山門の総高は三十三尺（約十メートル）で本格的な禅宗の鐘樓門として珍しい、という。さらに石段を上ると正面に本堂、右手に庫裏と寺宝の収蔵庫が建ち、左手に鐘撞堂と地藏堂とがある。周辺の庭園は箒目も正しく、清らかな風が境内に流れていた。

絶海国師（ぜっかいこくし）

絶海中津（ぜっかいちゅうしん）、仏智応照国師とも云う（一三三六〜一四〇五）。

南北朝、室町前期の禅僧（臨濟宗）で土佐生まれ。夢窓国師に師事、応安元年（一三六八）入明。帰国後、天竜寺、甲斐恵林寺を経て鹿苑院に住す。

詩に長じ、義堂周信と共に五山文学の双璧。

ご本尊は三体（釈迦牟尼仏・文殊菩薩・普賢菩薩）

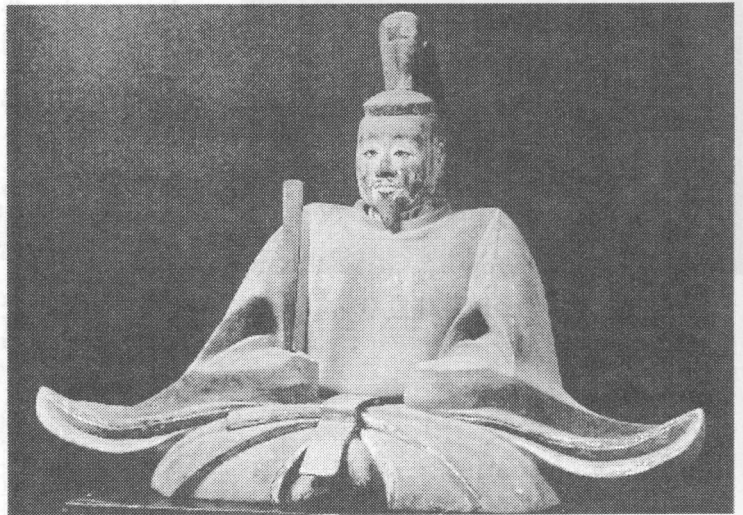
昭和十二年（一九三七）に新築落慶したという入母屋造りの本堂内には、鎌倉末期から室町初期の作と云われる三尊仏が祀られている。

三尊仏は「釈迦牟尼仏」を中に、左手に仏の智慧（般若）を象徴する「文殊菩薩」、右手に仏の仏道修行の功德を象徴する「普賢菩薩」を脇侍わきざむらいにして並んでいる。どちらの菩薩も緒仏の中では上席を占め、常に仏の教化と濟度を助けるという。

一説によれば文殊菩薩と普賢菩薩とは兄弟で、父親は阿弥陀仏という。阿弥陀仏は、元はインドのある国の王子であったが出家して西方浄土、つまり極楽浄土を開いたとされる。智慧の象徴としては「虚空蔵菩薩」と「文殊菩薩」とがあるが、虚空蔵菩薩の智慧は記憶力・博學といった意味合いの云わば学者的智慧、文殊菩薩のそれは実際の困難に当たったの正しい判断、巧妙な処理方法の案出といった、云わば商人・政治家の智慧であるとする。密教では、文殊菩薩は獅子に乗った姿で、普賢菩薩は白象に乗った姿で描かれている（仏教辞典）。

### 足利尊氏公座像

本堂内、正面右手に尊氏公の凛々りんりんしい座像が涼しく安置されている。この座像は、尊氏存命中に彫られたもの



▲等身大と伝えられる足利尊氏座像

と伝えられる。京都山科やましなの地蔵寺の寺伝によると座像は二体造られ、一体は地蔵寺へ、一体は足利家の菩提寺である等持院とうじいんに納められた、という。と

ころが山科の地蔵寺は明治十一年（一八七八）、廃仏毀釈のあおりを受けて廃寺となったため、豊後安国寺に移管されて今日に至っている。

一方、等持院の座像は江戸時代になって、尊氏が逆賊扱いされた折りに京都三条川原で打ち壊されてしまった。その背景には、江戸時代中期に「国学」が盛んとなり、

その主流（賀茂真淵<sup>まぶち</sup>、本居宣長<sup>もとおりのりなが</sup>、平田篤胤<sup>あつたね</sup>など）から尊氏が国賊扱いされたためと云われる。安国寺の尊氏座像は、日本最古の等身大寄木<sup>よせき</sup>作りの木像である。

### 足利尊氏と縁のある品々

本寺境内の地藏堂に祀られている木造の延命地藏尊立像（県指定文化財）は尊氏存命中に造られたもので、尊氏が常日頃崇敬していたと伝えられている。京都山科に地藏寺が建てられた折り、ご本尊として祀られることに

なった。爾来、虫封<sup>むしふうじ</sup>、安産祈願の祈禱所として皇室からの参拝もなされたと伝えられている。

この立像は鎌倉初期の惠信僧都<sup>そうず</sup>の作といわれ、総丈四尺五寸（約一三六センチメートル）で衣や袈裟<sup>けさ</sup>には今なお彩色のあとが残されている。尊氏は夢窓国師<sup>きえ</sup>に帰依し、後醍醐天皇の冥福を祈るために「天竜寺」を創建、その費用を得るために元と交易した。天竜寺船の名はこれに由来する。

ところで、赤穂浪士で知られる大石内蔵助は山科閑居中、ひそかにこの地藏尊に「仇討ち成就を祈願していた」

▲木造延命地藏尊立像

と伝えられており、仇討ち成就後は四十七士の戒名<sup>かいみょう</sup>を連署した巻紙を足下に納め、歴代の住職によって供養されてきたという由緒をもつ。また、大石内蔵助と縁がある「お軽<sup>かる</sup>の像」も安置されている。お軽は内蔵助が山科閑居中の愛妾であるが、ドラマ忠臣蔵などでは茨<sup>いばら</sup>

なかに咲く一輪の可憐な花として登場している。

おわりに

元寇<sup>げんこう</sup>の乱以来の戦乱によって死亡したすべての人々、敵も味方も野獸に至るまで、一切の御靈<sup>ごりょう</sup>を慰めるために光厳上皇の院宣<sup>いんせん</sup>が下り、寺は「安国寺」、塔には「利生塔」と呼ぶ称号が勅許された。それは貞和元年（一三四五）のことであった。

以来、六百六十年近くの年月を経た。この間、安国寺の最大の庇護者であった尊氏も豪族たちも去り、また多くの戦乱があった。自然災害も、廃仏毀釈もあった。そのため、もともとの姿をそのまま伝えている寺院はほとんど無いといわれる。いずれの寺院も「安国寺」の法灯を守ろうと必死に再建、再興を重ねてきた。しかしながら、六百六十年の歴史は重い。一国一寺の六十八寺のうち、現存するのは四十二寺である。残りの二十六寺は廃寺または、未詳という。今後の調査、研究によって新たな発見があることを願ってやまない。本稿は主に全国安国寺会編『安国寺風土記』（平成十二年三月刊）を参考

にさせていただいた（写真も同じ）。郷土史が好きではあるが、専門家ではないので間違い、勉強不足の点もあるが、何卒お許しを願いたい。（終）

△参考▽ 日本現在の仏教の宗派と概数（編集部）

奈良時代・法相宗一寺院数	六〇	信徒数	約六十一万人
・華嚴寺	五八	〃	四万五千人
・律宗	一一五	〃	一三万五千人
平安時代・天台宗	約四二〇〇	〃	三十一万五千人
・真言宗	約一万二千	〃	一三八〇万人
鎌倉時代・融通念仏宗	三五七	〃	一三万人
・浄土宗	約八千	〃	六四五万人
・浄土真宗	約二万	〃	一三三五万人
・時宗	四一四	〃	二四万人
・臨濟宗	約五八〇〇	〃	一九八万人
・曹洞宗	約一万五千	〃	六八八万人
・日蓮宗	約六八〇〇	〃	三四二〇万人
江戸時代・黄檗宗	四七〇	〃	三六万人

（山野他共著『仏教宗派の常識』より）